

「卒婚」というカタチ

小島慶子さん
©鈴木愛子



弘兼憲史さん
写真提供

離婚するほどでもないが、一緒に住みたくない。あるいは互いに干渉せずにそれぞれの人生を送りたい。さまざまな理由で「卒婚」「つかず離れず婚」を選ぶ人、望む人が増えている。夫婦それぞれのカタチから見えてくるものは何なのか。

亭主元気で留守がいい

このフレーズ。37年もの時を経て、今は「亭主元気で別居がいい」ともいえる時代になった。そして生まれたのが「卒婚」というスタイルだ。「つかず離れず婚」とか、住まいを別にすると、ころから「別住」ともいう。女性だけでなく男性も望む人が増えている、その姿を追った。

※

明治安田生活福祉研究所
(現・明治安田総合研究所)



吉田潮さんと夫

漫画家の弘兼憲史さん(76)は、「別住」を貫いている。結婚は、43年前。互いに別々の住まいを持ち、自由に暮らす。

「一人暮らしパラダイス」という本も出すほど、もともと一人暮らしが性に合っている。人といると気を遣ってとても疲れてしまう。一人である方が楽というの

は昔から。「つかず離れず」という婚姻スタイルも、もとを正せばただ僕は一人暮らしが好き。それだけなんです」(弘兼さん)

二人ともそれぞれ一軒家に暮らす。しかし年を重ねてその形が変わってきた。「妻が娘夫婦と、私が息子夫婦と同居することになりました。月に数回は、息子夫婦や娘夫婦と妻の家族み

んなが集まる機会を持ちます。こういう距離感が楽です」(同)

互いの人生と時間を尊重したスタイルだ。息子夫婦との同居といっても玄関も別の完全な二世帯住宅。あまり顔を合わせることもないという。メリットがある

とすれば、孤独死を避けられるというぐらいい。そして、同世代に向けてこう話す。「年を取ったら、いろんなことが面倒くさいというふうになりますよね。そうやってくると、やはり今までは違う生き方があるのではないでしょうか。気楽に

一緒に住む夫婦より会話が多い

コラムニストの吉田潮さん(51)は、11年に結婚。その始まりから別居婚だ。夫婦の仕事のベースが、それぞれ別の場所にあったからだ。元俳優の夫(58)は

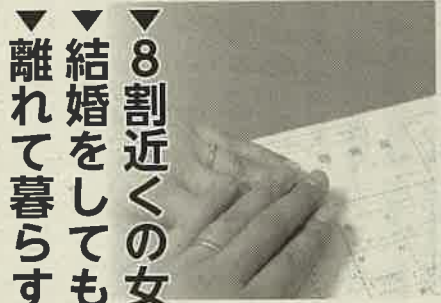
自分一人で暮らしたい、と望む人は世の中いっぱいいると思います。例えば家の近くに6畳一間のマンションを借りて寝泊まりする。これも別住。気持ちもリセットできてよいと思います」(同)

自分のプライベート空間を持つことで、家族や夫婦間の日ごろの気遣いから離れることができるという。それができなければ、住まいの中に、自分部屋を確保。「男も女も『今日どこに行った』とか聞くのも聞かれないのもうっとうしいと思います」(同)

静岡県で代々続く干物屋の4代目。家業を立て直すために実家で暮らす。「私を巻き込まないようにという優しさもあったと思います」(吉田さん)かたや吉田さんはコメン

テーターとしてのテレビ出演も多く、都心のマンション暮らしが好都合。「いざれそっちへ行くよ」で始まった別居。しかし、当初は寂しかったと振り返る。「夫が『なんか布団に入った時、寂しいなあって思うんだよ』ってぼろっと言ってきた時は『そんなこと、言わないでよ』と私も切なくなってしまう……。でも今はそれも乗り越えたというか。会いに行けばいいし。くればいいし。ほぼ毎日連絡して顔を見て話しているし、むしろ一緒に住んでいる夫婦よりも会話めっちゃ長いですよ」(同)

別居婚歴12年。つかず離れず婚の良い点は、「優しかなれる。あらが見えない。細かいことが気にならない」なのだという。互いに「嫌だな」と感じた点があれば、それも言うようにした。「そういうのは言われるま



▼8割近くの女性が肯定的
▼結婚をしても、それぞれ自分の空間を持つ
▼離れて暮らすと相手への感謝の気持ちが増える

が2018年に行った結婚に関する意識調査によると、卒婚に関する印象は、年齢が高くなるほど肯定的で、60代前半男性が61・4%、女性78・7%。また、株式会社ハルメクが21年に読者1500人に行ったインターネットアンケートでは、「卒婚実行中」が15・5%、「実践したい」19・4%、「まあまあ実践したい」が31・8%であった。*

実行中が2割弱もいて、そのうえ半数以上が卒婚に興味があるという結果。中高年になっても、いや中高年になったからこそ夫や妻から解放され、自分の人生

を歩くためにも、別々の場所ですて生きたいと考えるのだろうか。

31

※出典：ハルメク365「熟年夫婦の『卒婚』」
否定派は67%！実行中という人も

「卒婚」という現代夫婦のカタチ

「結婚は、幸せの一つの形。でも人は変化します。子育て後の人生を夫婦で話し合い、関係を更新する。それを可能にするのは、精神的・経済的な自立です。自立が叶わない人を支えるのは、義理か義務か諦めか。それも愛なのか。人道的配慮と、人生を大切にすることを両立するには。大きな問いですね」(同)

これまで紹介した3人と異なり、否定的な理由から別居婚を始めた人も紹介しよう。ともに60代の会社社長(妻)と会社経営者(夫)夫婦。夫の浮気が原因で別居。娘よりも年下の相手と「ただ遊びたかっただけ」という夫に、妻は怒り「出てけ」と家から追い出した。しかし、35年も夫と暮らしてきて初めて一人になると、「夫にどれだけ守られていたか」を実感する。一方で、ほどよい距離で付き合えるようになった。

夫婦は今も別居中だが、高地に旅行をしたり、山登りに行ったりしている。妻は言う。

「前よりすごく仲良くなった。夫以外の男性と話すこと自分にとって夫に代わる人はいないって感じてしまっ」

毎週のように二人で外出するなんて、まるで交際中

夫婦問題研究家の岡野あつこさんはこう話す。

「卒婚という形をとって妻が家を出ることで、夫が自ら省みて、自分のモラハラに気づくこともあるんです。最初から妻が弁護士なんかをつけると向こうも戦闘モードになってしまっややくしくなる。卒婚は、妻から夫への『直してほし、変わってほしい』メッセージになりうるのです」

ずっと夫に寄り添い生き

のカップルのようではないか。

「卒婚をして2年たちます。が、離れて暮らすと、相手に対しての感謝の気持ちが見えてくるのと同時に、自分の性格の悪さなど、自身を見直すことができました。それが別居の最大のメリット。卒婚の最大の収穫なのだ実感しました」

てきた妻が、夫に見切りをつけて離婚したくなる。でも経済的な理由で離婚できない。不満を持ちながらひとつ屋根の下でキリキリしながら暮らすぐらいならば、「卒婚」を試みるのが良いという。

「人生のファイナルステージになって人の悪口を言ったり、恨んだりすることなく、あの人がいたからこれだけ奮奮できたんだとか、勇気が持てたとか、そうい

り話します。夫は親切で、温厚。家事全般をこなし、異国の地で子育てをしています」(小島さん)

別居の理由は子ども二人を豪州で育てたかったから。小学2年と5年で渡豪。夫が仕事をやめたタイミングだったため、自然と夫が豪州、小島さんが日本で一人暮らしとなった。

「最初のうちは寂し死にするかと思いましたが。よく死ななかつた! 今も寂しい時があります」(同)

これからのどうなるのか。生活のかたちや、家族のあり方については、子どもを第一に考えてきた。だが「息子たちも成人したし、次男の大学入学のタイミングで夫婦の今後を決めたいと考えている」という。

「婚姻を維持するかもしれないし、解消するかもしれない。真剣に話し合いの機会を持つとねと数年前から伝えてあります」(同)

縁があつて一緒になつた。23年間夫婦関係を続けている夫は「誰よりも多くの経験を共有してきた人」と話す。ただ夫婦でも当然、異なる人生を生きている。人権を尊重しながら、互いにとって最善の形を探るために、節目となるタイミングで関係を再考するのだという。それも「結婚」という枠組みに、こだわらずに柔軟に捉えているからだ。

「夫婦の間には深い傷もあります。私は感情よりも、縁あつて出会った人に対してどう責任を果たすか、という意識が強いのだと思います。それは夫にだけではなく、息子たちに対してもそうです」(同)

別居婚という形で繋がってきた夫との関係がこれからどう変化していくのかは、小島さん自身もわからないという。ただ夫婦のあり方についてはこう考えている。

「たえ卒婚できなくても、前向きな卒婚というイメージを持って、自分たち夫婦流の素敵な『卒婚形態』を作ったらいかなと思ひます。『卒婚のススめ』というより『卒婚に学べ』ですね」

離れてみると見えてくることはいっぱいありそう。結婚も人生も。

構成・文/記者 大崎百紀



イラストレーターとしても活躍する吉田潮さん

でわからないもの。私は夫が便座の蓋をバーンと閉めるのが嫌だったんです。夫からは『食事中に鼻をかむの、やめてほしい』と言われました(笑)」(同)

別居婚を続けているが、「老後で新婚かな!」と言う。吉田さんが今夏に住み替えた都内のマンションは、「私仕様になっていて夫の入るスペースがない」と笑うが、2匹の猫と

の一人暮らしには広すぎるように見える。ここで夫婦二人がいずれ暮らしことになるようだ。

夫は去年の8月に家業を閉じることを決断。両親を見送ってから吉田さんと一緒に住むと考えているのだ。

「互いに両親が健在なのでこれからのいろいろやってくると思ふ。介護とか家とか土地とかの問題が。でも

相手に対してどう責任を果たすか

8000*離れた別居婚をして10年目なのがエッセイストでタレントの小島慶子さん(51)だ。

豪州パースで、夫(58)が、大学3年の長男、高校3年の次男と暮らしている。生活を支えるのは日本で働く小島さん。子どもはまだ小さかった頃は年に10回程度渡航していたが、今は年3、4回。離れていても毎日、

お互いそれぞれでやろうって決めてる。私も自分の親の介護を理由に、夫と同居とかも考えていません。私も夫も自分が一番好き。お互い世界で2番目に好きな人同士で結婚しているから、お互いに自分の機嫌を取っておかないと相手に優しくなんてできない。夫は自分をないがしろにしない人。だから安心してます」(同)

朝晩Zoomで会話。

「今日あったことやニュースについてや雑談も。長い時は2時間くらい繋いでいます。もしかしたら一般的な家庭よりも親子の会話が多いかもしれません。次男はいま受験勉強で忙しいので、長男とよく話していますが、その後で夫が歩くのが見える。そんな夫とは、用事があれば電話でゆっく

縁があつて一緒になつた。23年間夫婦関係を続けている夫は「誰よりも多くの経験を共有してきた人」と話す。ただ夫婦でも当然、異なる人生を生きている。人権を尊重しながら、互いにとって最善の形を探るために、節目となるタイミングで関係を再考するのだという。それも「結婚」という枠組みに、こだわらずに柔軟に捉えているからだ。

「夫婦の間には深い傷もあります。私は感情よりも、縁あつて出会った人に対してどう責任を果たすか、という意識が強いのだと思います。それは夫にだけではなく、息子たちに対してもそうです」(同)

別居婚という形で繋がってきた夫との関係がこれからどう変化していくのかは、小島さん自身もわからないという。ただ夫婦のあり方についてはこう考えている。